



Title	西フリジア語の文法構造：動詞（7）
Author(s)	清水， 誠
Citation	北海道大学文学研究科紀要， 111， 51-94
Issue Date	2003-11-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34060
Type	departmental bulletin paper
File Information	111_PL51-94.pdf



西フリジア語の文法構造 — 動詞 (7) —

清 水 誠

Struktuer fan it Westerlauwersk Frysk

— tiidwurd (7) —

(*The Annual Report on Cultural Science* No. 111). Graduate School of Letters, Hokkaido University, Sapporo, Japan 2003. ISSN 1346-0277)

SHIMIZU Makoto (mshimizu@lit. let. hokudai. ac. jp)

§ 89 派生動詞：概観

(1) 動詞の派生 (de ôflieding)

動詞を派生するために用いる語形成手段には二つある。それは「接尾辞」(it efterheaksel) と「品詞転換」(de konverzje) である。前者は動詞から動詞を派生し、後者は動詞以外の品詞から動詞を派生する。品詞転換には名詞や形容詞などをそのまま語根とする「ゼロ品詞転換」(de keale konverzje) と、それに「加音」(it augmint) をつけて語幹とする「加音つき品詞転換」がある。

① 接尾辞による動詞の派生

biddelje 「物乞いする」(動詞 bidde 「祈る, 懇願する」+接尾辞 -el)
farkje 「船に乗る, 航海する; 船遊びをする」(動詞 farre 「船に乗る, 航海する」+接尾辞 -k)

② 品詞転換による動詞の派生

i) ゼロ品詞転換

sniebalje 「雪玉を投げる, 雪合戦をする」(名詞 sniebal 「雪玉」)

betterje 「(健康・天候などが)回復する, 改良・改心する」(形容詞 better 「より良い」)

ii) 加音つき品詞転換

aktivearje 「活性化する」(形容詞 aktyf 「活動的な」+加音 -ear)

blomkje 「開花する, 趣味で園芸をする」(名詞 blom 「花」+加音 -k)

上例のように, 派生動詞は大部分が「je-動詞」 (§ 69, 71)である。ただし, -iを含む母音で終わる語 (-y/-ij/-ei/-ui/-aai/-oai) は「e-動詞」である。

jûchheie 「歓声を上げる, 喝采する」(jûchhei 「歓声, 喝采」)

オランダ語とドイツ語で上記の語に対応するのは次の語である。

フ. biddelje (bidde) ⇔ オ. bedelen (bidden) ⇔ ド. betteln (beten)

farkje (farre) ⇔ [spelevaren] (varen) ⇔ なし (fahren 「車・列車で行く」)

sniebalje (sniebal) ⇔ sneeuwballen (sneeuwbal) ⇔ なし (Schneeball)

betterje (better) ⇔ beteren (beter) ⇔ bessern (besser)

aktivearje (aktyf) ⇔ activeren (actief) ⇔ aktivieren (aktiv)

jûchheie (jûchhei) ⇔ juichen (gejuich) ⇔ jauchzen (Gejauchze)

上記の手段で動詞を派生するときに, 「割れ」 (§ 10) や短母音化 (§ 9) を起こす語がある。また, 語幹が -t/-d で終わる語では「je-動詞」の -je との連続で規則的に破擦音化 (§ 18(5)) が起こり, -tsje [tʃə]/-dzje [dʒə] となる。以下, 品詞転換による派生動詞の例を示す。

triedzje [trɪdʒə] 「糸・(豆などのさやの) 筋を取り除く」(tried [triət] 「糸, (豆などのさやの) 筋」, 「割れ」)

drafkje [dráfkjə] 「小走りに歩く, (馬が)速足で歩く」(drave [drá:və] 「走る, (馬が) 速足で歩く」, 短母音化)

sljochtsje 「平らにする」(sljocht 「平らな」, 破擦音化)

krantsje 「新聞を読む」(krante 「新聞」, 破擦音化)

bêdzje 「宿泊所を提供する, 泊める」(bêd 「ベッド」, 破擦音化)

☞ オランダ語とドイツ語で上記の語に対応するのは次の語である。

フ. sljochtsje (sljocht) ⇔ オ. slechten (slecht) ⇔ ド. schlichten (schlicht)
bêdzje (bêd) ⇔ なし (bed) ⇔ betten 「寝かせる」 (Bett)

摩擦音化は -je と連続しないときには起こらず, -t/-d のままである。

Ik *krantsje*. 「私は新聞を読む」 ⇔ Hy *krantet*. 「彼は新聞を読む」 (krants-je)

Ik *bêdzje* har. 「私は彼女を泊める」 ⇔ Hja *bêdet* my. 「彼女は私を泊める」 (bêdzje)

(2) 接頭辞の役割

派生動詞が非分離動詞の接頭辞 (be-/fer- § 87) を伴うことがある。

bebetterje 「(健康・天候などが) 次第に回復する」

ferbetterje 「(基準を満たすように) 訂正・修正する」

⇔ betterje 「(健康・天候などが) 回復する, 改良・改心する」 (better 「より良い」)

☞ オランダ語とドイツ語で上記の語に対応するのは次の語である。

フ. ferbetterje (better) ⇔ オ. verbeteren (beter) ⇔ ド. verbessern (besser)

この場合, 「接頭辞 be-/fer- が形容詞 better から非分離動詞 bebetterje/ferbetterje を派生する」という記述を見かけることがある。

非分離動詞 bebetterje/ferbetterje ← [派生] ← 形容詞 better

しかし, これは正しくない。西フリジア語では品詞を変更するのは語の右側 (語末) につく接尾辞であり, 語の左側 (語頭) につく接頭辞ではない。合成語でも右側の要素が品詞を決定し, 名詞ならば合成名詞全体の性を決定する。接頭辞は同一品詞内でアスペクト (it aspekt), 結合価 (de falinsje), その他の語の意味を変更するにとどまる。接頭辞による非分離動詞は, 接尾辞の付加または品詞転換によって派生した動詞を経由して形成されると考えるべきである。

非分離動詞 bebetterje/ferbetterje ← [派生] ← 動詞 betterje ← [派生]
← 形容詞 better

語によっては、接頭辞がつかない動詞が存在しないことがある。

bemantelje「ごまかす、隠ぺいする」(mantel「マント、コート」, *mantelje という動詞は存在しない)

fergrutsje「拡大する」(grut「大きい」, *grutsje という動詞は存在しない)

☞ オランダ語とドイツ語で上記の語に対応するのは次の語である。

フ. bemantelje (mantel) ⇔ オ. bemantelen (mantel) ⇔ ド. bemänteln (Mantel)

fergrutsje (grut) ⇔ vergroten (groot) ⇔ vergrößern (groß)

しかし、だからと言って、接頭辞 be-/fer-が名詞から直接、動詞を派生するとみなすのは正しくない。接頭辞がつかない動詞が存在しないのは、個々の語の性質に由来する単発的な現象にすぎない。以下で述べるように、西フリジア語では品詞転換によって動詞以外の品詞から動詞を派生する生産的な手段が存在するのだから、接頭辞がつかない動詞が存在しないということは、意味的な理由に由来する。すべての語について語形成手段による派生語が完璧に存在する必然性はない。語彙的には実現されていなくても、接頭辞がついた非分離動詞はあくまで動詞から派生したと考えるべきである (Veenstra 1988, Hoekstra 1993: 11f., Hoekstra 1998: 155)。

非分離動詞 bemantelje ← [派生] ← 動詞 *mantelje ← [派生] ← 名詞 mantel

非分離動詞 fergrutsje ← [派生] ← 動詞 *grutsje ← [派生] ← 形容詞 grut

(3) 接尾辞と品詞転換以外による派生動詞

接尾辞と品詞転換以外による派生動詞のペアが少数存在する (Boersma/Van der Woude 1980²: 109)。それは歴史的に古くからゲルマン語に共通の語形成手段によるもので、接尾辞 -j による使役動詞(kausativen, かつての「jan-動詞」)と、子音重複(ド. Geminat)による強意動詞(yntensiven)であり、動詞から動詞を派生する。次に代表的な例を示す(ゲルマン祖語(ゲ.))。

① 接尾辞 -j による使役動詞 (かつての「jan-動詞」)

felle 「(木を) 切り倒す, 打ち倒す」 (<ゲ. *fall-eja-)

← falle 「倒れる, 落ちる」 (<ゲ. *fall-a-)

② 子音重複による強意動詞

(jin) bûke 「身をかがめる」 (<ゲ. *bukk-ja-)

← bûge 「曲がる, 曲げる」 (<ゲ. *beug-a-)

ともにほとんど「je-動詞」ではなく、「e-動詞」である。②では語幹子音が g から k に交替するが、この k は接尾辞 -k (§ 90 (2)) とは無関係である。①は歴史的にウムラウト (ド. Umlaut) を伴うことが多い。西フリジア語ではドイツ語と違って、ウムラウトは語形成に果たす役割をほとんど担っていない。両者はごく散発的に見られるにすぎず、西フリジア語の構造に関与しているとは言えないが、便宜的に次にまとめておく。

③ 接尾辞 -j による使役動詞 (かつての「jan-動詞」)

felle 「(木を) 切り倒す, 打ち倒す」 (falle 「倒れる, 落ちる」)

sette 「置く, 据える」 (sitte 「すわっている, 置いてある」)

次の語では歴史的な理由から意味的な対応が不十分になっている。

fieri 「導く, 実施する」 (farre 「船に乗る, 航海する」 < 「行く」)

liede 「導く, 案内する, 指導する」 (lije 「被る, 苦しむ」 < 「行く, 過ぎる」)

次の語では「e-動詞」のほかに「je-動詞」と -g を伴った「je-動詞」(gje-動詞, § 91 (4)) の語形が併存している。

drinze/drinzje/drinzgje 「水を飲ませる, 水にひたす」 (drinke 「飲む」)

☞ オランダ語とドイツ語で上記の語に対応するのは次の語である。

フ. felle (falle) ⇔ オ. vellen (vallen) ⇔ ド. fällen (fallen)

sette (sitte) ⇔ zetten (zitten) ⇔ setzen (sitzen)

fieri (farre) ⇔ voeren (varen) ⇔ führen (fahren 「車・列車に乗って行く」)

liede (lije) ⇔ leiden (lijden) ⇔ leiten (leiden)

drinze/drinzje/drinzgje (drinke) ⇔ drenken (drinken) ⇔ tränken (trinken)

④ 子音重複による強意動詞

(jin) bûke 「身をかがめる」(bûge 「曲げる」)

nikke 「うなずく, 首を縦に振る」(nige/niigje 「おじぎをする」)

wikke 「手に取って(…の)重さを量る, 熟考する, 比較検討する」(weage 「(…の) 重さを量る, 熟考する」)

オランダ語とドイツ語で上記の語に対応するのは次の語である。

フ. (jin) bûke (bûge) ⇔ オ. (zich) bukken (buigen) ⇔ ド. (sich) bücken (biegen)

nikke (nige/niigje) ⇔ nikken (nijgen) ⇔ nicken (neigen)

wikke (weage) ⇔ wikken (wegen) ⇔ なし (wiegen)

§ 90 接尾辞 (it efterheaksel) による派生動詞

動詞を派生する接尾辞には -el/-er, -k があり, 「反復・短縮 (縮小)」(it iteratyf/diminutyf, エ. frequentative/diminutive) によって動作が集中的に強く起こるという強意(yntensyf)の意味を表わす。生産性はいずれも低い。

(1) 接尾辞 -el/-er

動作の「反復」を表わすが, もとの動詞が示す動作よりは小刻みに起こるというニュアンスを伴うことが多い。もとの動詞が -r で終わるときには -el がつき, -l で終わるときには -er がつくが, それ以外に両者の使い分けは明確ではない。もとの動詞にすでに反復の意味があり, 接尾辞 -el/-er がその反復の意味を強めるにすぎないこともある。

(a) 接尾辞 -el

biddelje 「物乞いをする」(bidde 「祈る, 懇願する」)

hinkelje 「石蹴り遊びをする」(hinkje 「足を引きずって歩く」)

soarrelje [swārɛljə] 「グツグツ音をたてて煮える」(soarje [swārjə] 「(グツグツ音をたてて) 煮える」)

stoartelje [stwátɛljə]/stoarrelje [stwárɛljə] 「つまづく, よろめく」(stoarte [stwátə] 「落ちる, 突入する」)

wevelje 「(前後左右に) 何回も揺れる」(weevje/weve 「織る, (前後左右に) 揺れる」)

wig(g)elje 「(前後左右に)何回も揺れる」(wiigje 「(前後左右に)揺れる」)
wippelje 「(いすなどが) ぐらぐらする, ガタガタする」(wippe 「シー
ソーをこぐ, 跳ねまわる」)

☞ オランダ語とドイツ語で上記の語に対応するのは次の語である。

フ. biddelje (bidde) ⇔ オ. bedelen (bidden) ⇔ ド. betteln (beten)
hinkelje (hinkje) ⇔ hinkelen (hinken) ⇔ [hüpfeln] (hinken)
wig(g)elje (wiigje) ⇔ wiegelen (wiegen) ⇔ なし (wiegen)
wippelje (wippe) ⇔ wippen/wiebelen (wippen) ⇔ なし (wippen)

(b) 接尾辞 -er

gûkerje 「じっと目をこらす, じりじりと熱望する」(gûkje 「見る」)
klammerje 「ギューギューはさみつける, (歯を) ギシギシ食いしばる」
(klamme/klamje 「はさむ, (歯を) 食いしばる」)
klapperje 「カタカタ・ガタガタ音をたてる, (歯が) ガチガチ鳴る」
(klappe 「パタンと音をたてる, パタンと開く・閉じる」)
snikkerje 「すすり泣き続ける」(snikke 「すすり泣く」)
tûkerje 「ピリピリ・ズキズキ痛む」(tûkje 「(ピリピリ・ズキズキ) 痛む」)
bibberje 「(寒さや恐怖などで) ブルッと身震いする, ぞくぞくする」
(beve 「震動する, (寒さや恐怖で) 震える」)

☞ オランダ語とドイツ語で上記の語に対応するのは次の語である。

フ. klapperje (klappe) ⇔ オ. klapperen (klappen) ⇔ ド. klappern (klappen)
klammerje (klamme/klamje) ⇔ なし (klemmen) ⇔ klammern (klam-
men)
bibberje (beve) ⇔ bibberen (beven) ⇔ bibbern (beben)

(c) 接尾辞 -el/-er

-el と -er がともにつく語がある。

knûkelje/knûkerje 「しわくちやになる, しわくちやにする」(knûk(j)e
「しわがつく, しわをつける」)
sipelje/siperje 「ジワジワにじみ出る, ポトポトしたたる」(sykje 「(ジワ
ジワ) にじみ出る, (ポトポト) したたる」)
stuitelje/stuiterje 「つまづく, よろめく」(stuitsje 「止める, 跳ね返る,

つまづく」)

☞ オランダ語とドイツ語で上記の語に正確に対応する語は見当たらない。

(2) 接尾辞 -k

(a) 意味と用法

動作の「反復・短縮（縮小）」を表わす。

dripkje 「軽く滴る，霧雨が降る」(drippe 「滴る，霧雨が降る」)

farkje 「船に乗る，航海する；船遊びをする」(farre 「船に乗る，航海する」)

flaikje 「ちょっとおだてる・お世辞を言う」(flaaije 「おだてる，お世辞を言う」)

gnyskje 「軽く冷笑する・あざ笑う」(gnize 「冷笑する，あざ笑う」)

pûlkje/puolkje 「しぼり出す，ほじくり出す」(pûlje/puolje 「むく，はがす」)

ruoikje/roeikje 「小さなストロークで静かに漕ぐ・漕いで漂う」(roeie 「こぐ」)

sobkje 「ちょっとすすする・しゃぶる」(sobje 「すすする，しゃぶる」)

De gong is út de ever, hy leit min of mear te dobberjen en sêftkes te *ruoikjen*. 「船は速度を落とし，多少，浮いたような感じになって静かに漂っていた」(Bosma-Banning 1981²: 76)

次の動詞はもとの動詞から子音の交替によって微妙に意味が異なる別の動詞が派生する例である。

drifkje 「(家畜を静かに) 駆りたてて集める，追い払う，(雲が) 漂う」

(driuwe 「駆りたてる，強いる，漂う」)

driuwkje 「静かに漂う」(driuwe 「同上」)

harkje 「聞く，耳を傾ける」(hearre 「聞く，聞こえる」)

wyfkje 「ためらう，揺らめく」(weve 「(前後左右に) 揺れる」；weve 「織る」は語源的にも異なる別の語)

-k+ -el という二重接尾辞がついた例もある。

driuwkelje 「静かに漂う」 (driuwe 「駆りたてる, 強いる, 漂う」)
 farkelje 「船遊びをする」 (farre 「船に乗る, 航海する」)
 ruoikelje 「小さなストロークで静かに漕ぐ・漕いで漂う」 (roeie 「こぐ」,
 Boersma/Van der Woude 1980²: 110)

☞ オランダ語とドイツ語で上記の語に正確に対応する語は見当たらない。

(b) 縮小辞 (指小辞) -ke との関係

歴史的には接尾辞 -k は縮小辞 (指小辞) -ke と同一だった。つまり, 古くは動詞にも名詞と同じく縮小形 (指小形) があった。しかし, 今日では接尾辞 -k と縮小辞 -ke は別であるとみなす必要がある。なぜなら, 名詞に見られる縮小辞には -ke/-tsje/-je という異形態があるのにならして, 動詞接尾辞は -k に限られ, 他の異形態はほとんど存在しない。そもそも異形態 -je は語末の -je と重なるので現われることができず, 語幹が歯 (茎) 音 t/d/n/l で終わる動詞にも -tsje はつかず, -ke がつく (Hoekstra (1998: 142), Van der Meer (1988b), Van der Meer (1989) 参照。ただし, Van der Meer (1988b), Van der Meer (1989) は接尾辞 -k と加音 -k ((3) 参照) を区別していない)。

次の動詞は f の後で -t が現われる語形が併存する珍しい例である。

hifkje~hiftsje 「手のひらに乗せて重さを量る, 重さを量るために持ち上げる, 評価する」 (heve 「持ち上げる」)

☞ オランダ語とドイツ語で上記の語に正確に対応する語は見当たらない。

§ 91 品詞転換 (de konverzje) による派生動詞

(1) 品詞転換による動詞派生の種類

西フリジア語では品詞転換によって動詞以外の品詞から動詞を派生する語形成手段がきわめて生産的であり, 特筆に値する。古くから文法家もこの点を指摘している (Hoekstra 1998: 151f.)。名詞と形容詞はもちろんだが, そのほかの品詞の例も見られる。オランダ語やドイツ語と比べると, 名詞からの品詞転換による動詞が多い。

品詞転換による動詞の派生方法には次の 2 種類がある。

① ゼロ品詞転換 (de keale konverzje)

② 加音 (it augmint) つき品詞転換

以下、この順に説明する。

(2) ゼロ品詞転換 (de keale konverzje)

加音を伴わずにもとの語をそのまま語幹とする動詞を派生するものを指す。

(a) 名詞からの品詞転換 (§ 85 (3))

名詞の示す物事に何らかの形で関連した動作を行なうという意味を広く表わす。具体的には、「名詞の表わす物事を施す・与える」という意味の「装備動詞」(仮称, ornativen)や「名詞の表わす物事を取り除く」という意味の「欠如動詞」(仮称, privativen)などが含まれる (Boersma/Van der Woude 1980²: 1108f.)。

bargje 「散らかす, めちゃくちゃにする」(baarch 「豚」)

damje 「ダムでせき止める」(dam 「ダム」)

dykje 「堤防を築く, 堤防でせき止める」(dyk 「堤防」)

dopje 「(木の実・卵などの)殻を取る, (豆などの)さやを取る」(dop 「殻, さや」)

eagje [Íəɣjə] 「見つめる, 目に入る, 目立つ」(each [Iəx] 「目」)

fervje 「塗装する, ペンキを塗る」(ferve 「塗料, ペンキ」)

jûchheie 「歓声を上げる, 喝采する」(jûchhei 「歓声, 喝采」)

manje 「男性と結婚する」(man 「男の人, 夫」)

piipje 「笛を吹く」(piip 「パイプ, 管, 笛」)

skile 「(…の)皮をむく」(skyl 「皮」)

skimerjûnje 「夕涼みをする, 夕暮れ時にすわって歓談する」(skimerjûn 「夕暮れ」)

sniebalje 「雪玉を投げる, 雪合戦をする」(sniebal 「雪玉」)

toskdokterje 「歯医者に通う」(toskdokter 「歯医者」)

tsjerkje 「教会に行く・通う」(tsjerke 「教会」)

wiivje 「妻帯する」 (wiif 「女の人, 妻」)

名詞の示す自然現象が起こるという非人称動詞になることもある。

daagje 「夜が明ける」 (dei 「昼, 日」)

jûnje 「夕方になる, 暗くなる」 (jûn 「夕方, 晩」)

nachtsje 「夜になる」 (nacht 「夜」)

summerje 「夏になる」 (summer 「夏」)

winterje 「冬になる」 (winter 「冬」)

waarljochtsje 「稲妻が光る」 (waarljocht 「稲妻」)

Wy koene it ljocht wol útdwaan, ik leau *it daget* al wat. 「私たちは明かりを消してもいいんじゃないか, もういくらか明るくなってきたと思う」 (daagje) (WFT 3/1986: 323 正書法変更)

As *it* net *winteret*, dan *summeret it* ek net. 「冬にならなければ, 夏にもならない(=冬来りなば, 春遠からじ。ことわざ)」 (Zantema 1984: 863)

☞ オランダ語とドイツ語で上記の語に対応するのは次の語である。ある程度の数は認められるが, 西フリジア語ほどは多くない。

- フ. eage (each) ⇔ オ. ogen (oog) ⇔ ド. なし (Auge)
 damje (dam) ⇔ afdammen (dam) ⇔ abdämmen (Damm)
 dykje (dyk) ⇔ bedijken (dijk) ⇔ eindeichen (Deich)
 dopje (dop) ⇔ doppen (dop) ⇔ [aushülsen/enthülsen (Hülse)]
 fervje (ferve) ⇔ verven (verf) ⇔ färben 「着色する, 染める」 (Farbe 「色」)
 jûchheie (jûchhei) ⇔ juichen (gejuich) ⇔ jauchzen (Gejauchze)
 manje (man) ⇔ なし (man) ⇔ スイス mannen (Mann)
 piipje (piip) ⇔ pijpen (pijp) ⇔ pfeifen (Pfeife)
 skile (skyl) ⇔ schillen (schil) ⇔ schälen (Schale)
 sniebalje (sniebal) ⇔ sneeuwballen (sneewbal) ⇔ なし (Schneeball)
 wiivje (wiif) ⇔ なし (なし) ⇔ [sich] beweiben (Weib)
 daagje (dei) ⇔ dagen (dag) ⇔ tagen (Tag)
 jûnje (jûn) ⇔ 稀 avonden (avond) ⇔ なし (Abend)
 summerje (summer) ⇔ zomeren (zomer) ⇔ sommern (Sommer)
 winterje (winter) ⇔ winteren (winter) ⇔ winteren (Winter)
 waarljochtsje (waarljocht) ⇔ weerlichten (weerlicht) ⇔ wetterleuchten (Wetterleuchten)

☞ 西フリジア語にはオランダ語と同様に「春めく」「秋になる」という動詞は見当

たらない (maitiid「春」, hjerst「秋」)。ドイツ語と北ゲルマン語では次のようになる(アイスランド語(ア), フェーロー語(フェ), ノルウェー語ブークモール(bokmål, ブ), 同ニューノシュク(nynorsk, ニュ), デンマーク語(デ), スウェーデン語(ス))。どれも非人称動詞。

ド. 古 lenzen「春めく」(古 Lenz「春」), sommern「夏になる」(Sommer「夏」), herbstel(n「秋になる」(Herbst「秋」), wintern「冬になる」(Winter「冬」)

ア. vora「春めく」(vor「春」), vetra「冬になる」(vetur「冬」)

フェ. vára「春めく」(vár「春」), sumra「夏になる」(summar「夏」), heysta「秋になる」(heyst「秋」), vetra「冬になる」(vetur「冬」)

ブ. våres「春めく」(vår「春」), 古 somres「夏になる」(sommer「夏」), høstes「秋になる」(høst「秋」), vintres「冬になる」(vinter「冬」)

ニュ. vårast「春めく」(vår「春」), haustast「秋になる」(haust「秋」), vintrast「冬になる」(vinter「冬」)

ス. våras「春めく」(vår「春」)

デ. 対応語なし

(b) 形容詞からの品詞転換

形容詞の示す性質・状態, それへの移行, その移行を生じさせる動作の意味を表わす。この三つの意味のどれを表わすかは語によって異なる。

i) grienje [grɪəˈjə]「緑色をしている・茂っている, 緑色になる・芽を出す, 緑色にする」(grien [grɪən]「緑色の」)

ii) deadzje [dɛdʒə]「殺す, 壊滅させる, (傷口などが) 直る」(dea [dɛə]「死んだ(変化形 deade)」)

iepenje [ɪəpəˈjə]「あく, あける」(iepen [ɪəpən]「あいている」)

kuolje「冷える, 冷やす」(koel「冷たい」)

readzje [rɛdʒə]「赤くなる, 赤くする」(rea(d)「赤い」)

suorje「酸っぱくなる, 酸っぱくする」(soer「酸っぱい」)

iii) folje「満たす」(fol「満ちた」)

rypje「熟す」(ryp「熟した」)

slûgie「うとうとする; 手間取る」(slûch「眠い, ぼうつとした, 鈍い」)

waarmje「暖める」(waarm「暖かい」)

形容詞の示す性質・状態に関連する動作を行なうという意味を表わす語も

ある。

gekje 「冗談を言う、ふざける」 (gek 「気の狂った、馬鹿げた」)

wyldze 「はじゃぎまわる、粗野に振る舞う」 (wyld 「野生の、粗野な」)

「je-動詞」のほかに同じ意味の「e-動詞」が併存するものがある。

koartsje [kwátʃə] ~ koarte [kwátə] 「短くなる、短くする」 (koart [kwat] 「短い」)

langje/lingje ⇔ lange/linge 「長くなる」 (lang 「長い」)

次の語は加音 -ig と関係がある ((3)(d))。

feiligje 「保護する」 (feilich 「安全な」)

☞ オランダ語とドイツ語にはほとんど上記の語に対応する語がある (slûgje などのように対応する形容詞を欠く語を除く)。ただし、使用頻度や意味の面で完全に対応するとは限らない。

フ. grienje (grien) ⇔ オ. groenen (groen) ⇔ ド. grünen (grün)

deadze (dea) ⇔ doden (dood) ⇔ töten (tot)

iepenje (iepen) ⇔ openen (open) ⇔ öffnen (offen)

kuolje (koel) ⇔ koelen (koel) ⇔ kühlen (kühl)

readze (rea(d)) ⇔ なし (rood) ⇔ (er-)röten (rot)

suorje (soer) ⇔ zuren (zuur) ⇔ säuern (sauer)

folje (fol) ⇔ vullen (vol) ⇔ füllen (voll)

rypje (ryp) ⇔ rijpen (rijp) ⇔ reifen (reif)

waarmje (waarm) ⇔ warmen (warm) ⇔ wärmen (warm)

gekje (gek) ⇔ gekken (gek) ⇔ なし (なし)

koart(s)je (koart) ⇔ korten (kort) ⇔ kürzen (kurz)

lang(j)e/ling(j)e ⇔ lengen (lang) ⇔ längen (lang)

feiligje (feilich) ⇔ beveiligen (veilig) ⇔ なし (なし)

(c) その他の品詞からの品詞転換

一部の副詞、数詞、間投詞から動詞をつくることがある。

útfanhûzje 「宿泊する、宿泊させる」 (副詞 útfanhûs 「宿泊している」)

ienentweintigje 「トゥエンティー・ワン (ブラックジャック) をする (= トランプ遊びの一種)」 (ienentweintich 「21」)

fjouwerje 「(馬が) ギャロップで走る・疾走する」 (fjouwer 「4」)

bimbamje 「キンコン・カランコロンという塔の鐘の音がする」 (bimbam

「キンコン、カランコロン (=塔の鐘の雑多な音)」

huie 「やじる, ブーイングをする」 (hui 「ブーブー (=やじる声)」)

piipje 「ピーピー鳴く, チューチュー鳴く」 (piip 「ピーピー, チューチュー」)

⇒ オランダ語で上記の語に対応するのは次の語である。ドイツ語では対応する語は見当たらない。

フ. ienentweintje (ienentweintich) ⇔ オ. eenentwintigen (eenentwintig)
⇔ ド. なし

bimbamje (bimbam) ⇔ bimbammen (bimbam) ⇔ ド. なし

piipje (piip) ⇔ piepen (piep) ⇔ ド. pfeifen (Pfeife)

(3) 加音 (it augmint) つき品詞転換

(a) 加音の種類と意味

品詞転換によって動詞になるもとの語には, 統語的・意味的な役割を担わない形態素である「加音」(it augmint) がつくことがある。加音には -ear, -k/-t, -ig, -el/-er があり, すべて「je-動詞」を形成するが, 生産的なのは -ear にとどまる。意味はゼロ品詞転換の場合と同様である。

加音には -k, -el/-er のように接尾辞と同形のものがある。接尾辞が動詞から別の動詞を派生するときに用いるのにたいして, 加音は動詞以外の品詞から動詞を派生するときに用いる点で異なる。また, 接尾辞は対応する動詞にたいして反復・短縮 (縮小) アスペクトの意味を付加するが, 加音は対応する動詞を欠き, 反復・短縮 (縮小) アスペクトの意味をとくに明示しない。

以下の用例は, もとの語が名詞か形容詞かといった品詞の区別なく示す。

(b) 加音 -ear [...jér] (earje-動詞)

この加音はおもにフランス語からオランダ語経由で借用された多数の外来語につくが, 生産性が高い。アクセントをもち, 「割れ」を起こして -earje [...jérjə] と発音する。オランダ語では -eer が対応し (-eer + -en > -eren [...é:rə(n)]), ドイツ語では -ier (-ier + -en [...i:rən]) が対応する。

aktivearje 「活性化する」 (aktyf 「活動的な」)

kompletearje 「完全にする, 補完する」 (kompleet 「完全な」)

protestearje 「抗議する」 (protest 「抗議」)

redenearje 「推論する, 論議する」 (reden 「理由, 根拠」)

studearje 「大学で学ぶ, 研究する」 (stúdzje 「大学での勉学, 研究」)

wurdearje/weardearje 「価値を認める, 重んじる, 評価する」 (wearde 「価値」)

☞ オランダ語とドイツ語で上記の語に対応するのは次の語である。とくにオランダ語ではすべて対応する語がある。

フ. aktivearje (aktyf) ⇔ オ. activeren (actief) ⇔ ド. aktivieren (aktiv)
kompletearje (kompleet) ⇔ completeeren (compleet) ⇔ komplettieren (komplett)

protestearje (protest) ⇔ protesteren (protest) ⇔ protestieren (Protest)
redenearje (reden) ⇔ redeneren (reden) ⇔ [reden] (Rede)

studearje (stúdzje) ⇔ studeren (studie) ⇔ studieren (Studie/Studium)
wurdearje/weardearje (wearde) ⇔ waarderen (waarde) ⇔ [werten] (Wert)

① 二重加音 (-is-ear)

もとの語が -l/-n/-r/-t という歯(茎)音で終わる場合には, 別の加音 -is がつくことが多く, -is-ear+je という二重加音による「je-動詞」になる。

legalisearje 「合法化する」 (legaal 「合法的な」)

modernisearje 「現代化・近代化する」 (modern 「現代的な, 近代的な」)

karakterisearje 「特徴づける」 (karakter 「特徴, 性格」)

konkretisearje 「具体化する」 (konkreet 「具体的な」)

☞ オランダ語とドイツ語で上記の語に対応するのは次の語である。すべて対応する語がある。

フ. legalisearje (legaal) ⇔ オ. legaliseren (legaal) ⇔ ド. legalisieren (legal)
modernisearje (modern) ⇔ moderniseren (modern) ⇔ modernisieren (modern)

karakterisearje (karakter) ⇔ karakteriseren (karakter) ⇔ charakterisieren (Charakter)

konkretisearje (konkreet) ⇔ concretiseren (concreet) ⇔ konkretisieren (konkret)

② もとの語が -yk で終わる場合

-yk で終わる語では k を s に変えて -ear + -je をつける。

publisearje 「出版する, 発表する」 (publyk 「公共の; 公衆」)

この場合, k を s に変えない語が併存することがある。k を s に変えない語形はゼロ品詞転換による動詞だが, 意味が異なる。

fabrisearje 「製造する」 ~ fabrykje 「趣味で工作する」 (fabryk 「工場」)

次の語は k を s に変えない例である (ただし, Hoekstra (1998: 154) には muzisearje という語形も記載されている)。

muzykje 「複数の人で音楽を奏でる, 演奏する」 (muzyk 「音楽」)

☞ オランダ語とドイツ語で上記の語に対応するのは次の語である。

フ. publisearje (publyk) ⇔ オ. publiceren (publiek) ⇔ ド. publizieren (Publik)

fabrisearje ~ fabrykje (fabryk) ⇔ fabriceren/fabrikeren ~ fabrieken (fabriek) ⇔ fabrieziere (Fabrik)

muzykje/ [muzisearje] (muzyk) ⇔ musiceren (muziek) ⇔ musizieren (Musik)

この加音は比較的新しい時代にオランダ語から借用した語に多く見られ, オランダ語の語形に酷似している。したがって, これは西フリジア語独自の品詞転換ではなく, オランダ語での対応語を西フリジア語に適合させて借用した結果にすぎないとも言える可能性がある。つまり, -ear 自体が生産的な加音なのではなく, オランダ語で対応する -eer をもつ語の数が多いにすぎないという考えかたである。次例のように, 品詞転換以前のもとの語が存在しなかったり, 西フリジア語内部の理由とは無関係に語形や意味が異なっていたり, 外来語的な接尾辞を伴うものがあるのはそのためとも言える可能性がある。

probearje 「試みる, 試す」 (proef 「試験, テスト」)

ave(n)searje 「前進する, 従事する」 (なし)

abstrahearje 「抽象化する」 (abstrakt 「抽象的な」)

abonnearje 「定期購読させる」 (abonnemint 「定期購読」)

observearje/obstrewearje 「観察する」 (observaasje/obstrewaasje 「観

察)」

servearje 「(食事などを) 出す, 給仕する」(servys 「食器」)

☞ オランダ語とドイツ語で上記の語に対応するのは次の語である。とくにオランダ語ではすべて対応する語がある。

フ. probearje (proef) ⇔ オ. proberen (proef) ⇔ ド. probieren (Probe)
 ave(n)searje (なし) ⇔ avanceren (avance(s)) ⇔ avancieren (Avance(n))
 abstrahearje (abstrakt) ⇔ abstraheren (abstract) ⇔ abstrahieren (abstrakt)
 abonnearje (abonnemint) ⇔ abonneren (abonnement) ⇔ abonneren (Abonnement)
 observearje/obstrewearje (observaasje/obstrewaasje) ⇔ observeren (observatie) ⇔ observeren (Observation)
 servearje (servys) ⇔ serveren (servies) ⇔ serveren (なし)

しかし、次例のように、オランダ語に存在しない語や、オランダ語では加音 -eer- を伴わない語も見られる。したがって、やはり加音 -ear- は西フリジア語として独自に生産性を獲得していると考えたほうが適切である。

bankerottearje 「破産する」(bank(e)rot 「破産; 破産した」)

⇔ オ. bankroet gaan 「同上」(bankroet 「同上」)

grûndearje 「設立する, 基礎を築く」(grûn 「基礎, 地面」)

⇔ オ. gronden 「同上」(grond 「同上」)

soberearje 「質素に暮らす」(sober 「質素な, 控えめな」)

⇔ オ. sober leven 「同上」(sober 「同上」)

(c) 加音 -k/-t (kje-動詞/tsje-動詞)

加音 -k は直前の子音の種類に応じて -t として現われることがある。加音 -k は反復・短縮 (縮小) のアスペクトを表わす接尾辞 -k (§ 90 (2)) と関係があるが (Hoekstra 1998: 153), とくにそのような意味を表わすわけではない。接尾辞 -k が歴史的に縮小辞 (指小辞) -ke と同一だったことは, § 90 (2)(b) で述べた。接尾辞 -k に異形態がほとんど見られないのにたいして, 加音 -k には -t という異形態が残っている。

① 加音 -k (kje-動詞)

もとの語が -n および一部で -d/-l で終わる場合以外では, 加音 -k がつ

く。

blomkje 「開花する, 趣味で園芸をする」 (blom 「花」)

briefkje [brjɪfkjə] 「文通する」 (brief [briɛf] 「手紙」)

buorkje 「農業を営む」 (boer 「農夫」)

fierkje [fjɪrkjə] 「遠くを見つめる, 切望する」 (fier [fiər] 「遠い」)

fūstkje [fúskjə] ([t] は脱落する) 「握手する」 (fūst [fust] 「こぶし」)

leafkje [lɪɛfkjə] 「愛撫する」 (leaf [lɪɛf] 「いとしい, 好きな」)

mûlkje 「口に合う, 口ごもる」 (mûle 「口」)

noaskje [nwáskjə] 「嗅ぎまわる, 詮索する; 気に入る」 (noas [noəs] 「鼻」)

pypkje 「パイプでタバコを吸う」 (piip 「パイプ」)

jookje 「jo で呼びかける」 (jo 「あなた (敬称)」)

loaikje [lɔaikjə, lwáikjə] 「怠けている, のんびり暮らす」 (loai [loəi] 「怠惰な, のんびりした」)

sleaukje 「ぐずぐずする, もたもたする」 (sleau 「のろい, 不活発な」)

次の語には加音 -k による品詞転換のほかに, 語末の半母音 [u] (/w/) をゼロ品詞転換によって音節初頭の子音 [w] として実現させ, 同じ意味の「e-動詞」を形成する語形が併存している。

dookje~dowe [dó:wə] 「do で呼びかける」 (do [do:u] 「君 (親称)」)

stookje~stowe [stó:wə] 「-sto を使って呼びかける」 (-sto [sto:u] (← -st 人称変化語尾 + -o (← do 「君 (親称)」))

次の語にはゼロ品詞転換による同じ意味の動詞が併存している。

rustkje [røskjə]/roastkje [rwáskjə] ~rustje [røʃə]/roastje [rwáʃə] (それぞれ [t] は脱落する) 「さびる」 (rust [røst]/roast [rwast] 「さび」)

☞ オランダ語とドイツ語で上記の語に対応するのは次の語である。両言語とも加音はつかない。

フ. buorkje (boer) ⇔ オ. boeren (boer) ⇔ ド. 古 bauern (Bauer)

noaskje (noas) ⇔ neuzen (neus) ⇔ なし (Nase)

loaikje (loai) ⇔ luieren (lui) ⇔ なし (なし)
rustkje/roastkje ~ rustje/roastje (rust/roast) ⇔ roesten (roest) ⇔ rosten (Rost)

② 加音 -t (tsje-動詞)

もとの語が -n および一部で -d/-l で終わる場合には、加音 -t がつく。これは加音 -k の異形態と考えられる (§ 32「縮小形」)。加音 -t は -je との連続で破擦音化によって規則的に -tsje [tʃə] となる。

feantsje [fjéntʃə] 「泥炭化する、沼沢地・湿地帯になる」 (fean [flən] 「泥炭、沼沢地、湿地」)

sintsje 「日光浴をする」 (sinne 「太陽」)

teantsje [tjéntʃə] 「つま先で立つ・歩く」 (tean [tlən] 「つま先」)

trientsje [trjéntʃə] 「涙が出る、涙する」 (trien [triən] 「涙」)

破擦音化は -je と連続しないときには起こらず、-t のままである。

Ik *teantsje*. 「私はつま先で歩く」 ⇔ Hja *teantet*. 「彼女はつま先で歩く」 (teantsje)

加音 -k と加音 -t による語形が併存するものがある。

túnkje ~ túntsje 「庭仕事をする」 (tún 「庭」)

koalkje [kwáلكjə] ~ koaltsje [kwáلتjə] 「キャベツを栽培する」 (koal [koəl] 「キャベツ」)

ゼロ品詞転換による同じ意味の語形が併存するものがある。

rjemkje ~ rjemje 「(牛乳から) 乳脂 (クリーム) を取り除く」 (rjemme 「クリーム、乳脂」)

skierkje [skjÍrkjə, skÍørkjə] ~ skierje [skjÍrjə, skÍørjə] 「灰色になる、白髪になる」 (skier [skiər] 「灰色の」)

slyd(s)kje ~ slydzje 「そりに乗る、そりで運ぶ」 (slide [slÍdə] 「そり」)

☞ 最後の語については、ほぼ同じ意味で slydjeie という動詞がある。

It giet dat it *slydjaet*. 「そりで滑るように物事が迅速に進行していく」 (Dykstra 2000: 631)

これは slide 「そり」の語末の -e が脱落した slyd- と動詞 jeie 「狩りをする、追い立てる、疾駆する」による複合動詞であり、本来、名詞抱合による抱合動詞

と言える。語形変化も動詞 *jeie* の変化そのままである。ただし、後半部の *jeie* という動詞の語彙の意味は希薄で、前半部の名詞 *slyd* に関連した動作が「荒々しく迅速に起こる」ということを表わし、名詞からの品詞転換による派生動詞 *slyd(s)kje*~*slydzje* に「拡大(指大)」(エ. augmentative)の意味を加えたものと解釈することもできる。また、前半部が他の名詞の例もいくつかある点を考慮に入れて、Hoekstra (1998:143) はこれを接尾辞 *-jei* による派生動詞とみなしている。

☞ オランダ語とドイツ語で上記の語に対応するのは次の語である。両言語とも加音はつかない。

フ. *feantsje* (*fean*) ⇔ オ. *vervenen* (*veen*) ⇔ ド. なし (北独 *Fenn/Fehn*)
sintsje (*sinne*) ⇔ (*zich*) *zonnen* (*zon*) ⇔ (*sich*) *zonnen* (*Sonne*)
trientsje (*trien*) ⇔ *tranen* (*traan*) ⇔ *tränen* (*Träne*)
túnkje~*túntsje* (*tūn*) ⇔ *tuinieren*/稀 *tuinen* (*tuin*) ⇔ なし (なし) [参考: *gärtnern* (*Garten*)]
rjemkje~*rjemje* (*rjemme*) ⇔ *romen* (*room*) ⇔ *abrahmen*/*entrahmen* (南独・奥 *Rahm*)
slyd(s)kje~*slydzje* (*slide*) ⇔ *sleden*/*sleeën* (*slede*) ⇔ *schlittern* (*Schlitten*)

☞ Van der Meer (1988b: (1) 67/(2) 6) は *feantsjer* 「泥炭採掘業者」/*feantsjerij* 「泥炭採掘業」、*túntsjer* 「園芸家、菜園経営者」/*túntsjerij* 「演芸、菜園経営業」という語形があることから、歴史的には上記の説明とは逆に、加音 *-t-* は加音 *-tsj-* に由来するという意見を述べている。

(d) 加音 *-el/-er* (*elje*-動詞/*erje*-動詞)

加音 *-k/-t* と同様に「反復」(*iteratyf*/エ. *iterative*) のアスペクトを表わす動詞接尾辞 *-el/-er* (§ 90 (1)(a)) に由来するが、とくにそのような意味を表わすわけではない。

poatelje [*pōætəljə*] 「速足で歩く、ちょこちょこ歩く」(*poat* [*pōæt*] 「動物・家具の」足)」

nestelje 「巣を作る」(*nêst* 「巢」)

uterje 「表明する、述べる」(*út* 「外に」)

wynderje 「風を起こす、風に吹かれる」(*wyn* 「風」、オ. *wind*)

☞ オランダ語とドイツ語で上記の語に対応するのは次の語である。

フ. *nestelje* (*nêst*) ⇔ オ. *nestelen* (*nest*) ⇔ ド. *nesteln* (*Nest*)
uterje (*út*) ⇔ *uiten* (*uit*) ⇔ *äußern* (*aus*)

(e) 加音 -ig (igje-動詞)

加音 -ig は齒(茎)音 (s/z, l, d/t, n) で終わる名詞と少数の形容詞につく。接頭辞を伴う例も多い (§ 87, 88)。-ig の i が脱落し (②), (4) の -g による派生動詞 (gje-動詞) とまぎらわしい語もある。

加音 -ig は歴史的に名詞から形容詞を派生する接尾辞 -ich (オ/ド, -ig, エ, -y) を加音に転用し, -ich がつかない名詞にも用いるようになったものと考えられる。たとえば, wettigje 「合法と認める」は形容詞 wettich 「合法的な」(名詞 wet 「法律」) の接尾辞 -ich を加音として転用し, 「je-動詞」を形成した結果と考えられる。たとえば, handigje 「(…の)手になじむ, (…にとって) 扱いやすい」は語形的に名詞 hân 「手」(複数形 hannen) よりも, d を含む形容詞 handich 「手ごろな, 便利な」に類似している。さらに, 加音 -ig は -ich で終わる形容詞をもたない名詞, たとえば krús 「十字架」から動詞 krusigje 「十字架にはりつけにする」を派生するときにも用いるようになり, 品詞転換による動詞形成の手段に発達したと考えられる。

加音 -ig が発達した理由のひとつには, 齒(茎)音 (s/z, l, d/t, n) と後続する -j の調音位置が接近しているために, 動詞の語幹と語尾の境界を明確にする形態的な必要性があったと考えられる。

加音 -ig はオランダ語やドイツ語にも存在し, 本来, 西ゲルマン語に共通しており, 中世後期から発達したものである (Hoekstra 1993a: 26ff.)。

① 「名詞+加音 -ig」(接尾辞 -ich を伴う形容詞が存在する語)

上述の handigje, wettigje 以外の例を示す。

sinnigje 「(…に) 気に入る」(sin 「感覚, 気持ち, 意義」, sinnich 「えり好みする」)

stiennigje [stjɪnəɣjə] 「石を投げて殺す」(stien [stiən] 「石」, stiennich [stjɪnəx] 「石だらけの」)

sûndigje/sondigje 「罪を犯す, 背く」(sûnde/sonde 「罪」, sûndich/sondich 「罪深い」)

befredigje 「満足させる」(frede 「平和」, fredich 「平和な」, 歴史的な理由で意味が異なる)

次の語にはゼロ品詞転換による同じ意味の動詞が併存している。

fredigje~freedzje 「柵で囲む, 柵を修理する」

befredigje~befreedzje 「境界をつける, 区切る」(befredigje には「満足させる」という意味もある)

ûntkrêftigje~ûntkrêftsje 「無力化する」(krêft 「力」, krêftich 「力のあ
る」)

☞ オランダ語とドイツ語で上記の語に対応するのは次の語である。

フ. handigje (hân, handich) ⇔ オ. handen (hand, handig) ⇔ ド. なし (Hand,
handlich)

wettigje (wet, wettich) ⇔ wettigen (wet, wettig) ⇔ なし (なし)

stiennigje (stien, stiennich) ⇔ stenigen (steen, stenig) ⇔ steinigen (Stein,
steinig)

sûndigje/sondigje (sûnde/sonde, sûndich/sondich) ⇔ zondigen (zonde,
zondig) ⇔ sündigen (Sünde, sündig)

befredigje (frede, fredich) ⇔ bevredigen (vrede, vredig) ⇔ befriedigen
(Fried(e)/Frieden, friedlich)

ûntkrêftigje~ûntkrêftsje (krêft, krêftich) ⇔ ontkrachten (kracht,
krachtig) ⇔ entkräftigen~entkräften (Kraft, kräftig)

② 「名詞+加音 -ig」(接尾辞 -ich を伴う形容詞が存在しない語)

-ig の i が脱落した語形やゼロ品詞転換による語形が併存する語がある。

einigje/eindigje~eingje~einje 「終わる, 終える」(ein 「終わり」)

beïerdigje~beïerdzje 「埋葬する」(ierde 「土, 地面」)

次の語はゼロ品詞転換による意味の異なる動詞が併存する例である。

krusigje 「十字架にはりつけにする」~kruse 「交差させる」(krús 「十字
架」)

☞ オランダ語とドイツ語で上記の語に対応するのは次の語である。

フ. enigje/eindigje~eingje~einje (ein) ⇔ オ. eindigen (eind(e)) ⇔ ド.
beendigen (Ende)

krusigje~kruse (krús) ⇔ kruisigen~kruisen (kruis) ⇔ kreuzigen
~kreuzen (Kreuz)

③ 形容詞+加音 -ig

少数の語に限られる。

jin ferwissigje 「確認する」 (wis 「確実な」)

fêstigje/festigje 「(注意を) 向ける, (期待を) かける, 設立する, 確立させる」 (fêst 「堅固な, 不動の, 安定した」)

reinigje 「掃除する, 洗淨する」 (rein 「清潔な, 純粋な」)

✎ オランダ語とドイツ語で上記の語に対応するのは次の語である。

フ. jin ferwissigje ⇔ オ. zich vergewissen (gewis) ⇔ ド. sich vergewissern (gewiss)

fêstigje/festigje (fest) ⇔ vestigen (vast) ⇔ festigen (fest)

reinigje (rein) ⇔ reinigen (rein) ⇔ reinigen (rein)

(4) 加音 -ig とは別の -g による「gje-動詞」

品詞転換の加音 -ig による「igje-動詞」とは別に, 歯(茎)音 (t/d, z/r) で終わる語に -g を加えてから -je をつける「gje-動詞」がある。今日では -z で終わる語に -g をつける例が大部分である。この -g の付加による「gje-動詞」は名詞からの品詞転換, 動詞からの派生, もとの名詞や形容詞などが存在しない語を含んでいて雑多であり, 品詞転換に用いる加音とは言えない。また, 加音 -ig による「igje-動詞」には -ig を含まない動詞が併存することは少なく, 語によっては明示的な意味の相違が見られることもあるが, -g による「gje-動詞」には -g を含まない動詞がほとんど併存し, 明示的な意味の相違は見られない。さらに, -g を含む「gje-動詞」はすべて文体的に書き言葉的であり, -g を含まない動詞は話し言葉的であるのにならして, 加音 -ig による「igje-動詞」にはこのような相違が認められない。最後に, この -g は西フリジア語に特有であり, オランダ語やドイツ語では対応する語に -g を含む語形は見られない。

bewiizgje~bewiizje/bewize 「証明する」 (bewiis 「証明」)

drinzgje~drinzje/drinze 「水を飲ませる, 水にひたす」 (drinke 「飲む」, § 89 (3)①)

grânzgje~grânzje 「(犬などが) うなる, 鼻声で話す」

grinzgje~grinzje 「(…と) 隣接している, (…と) 紙一重である」 (grins 「境界」)

priizgje~priizje 「価格を定める；ほめる評価する」(priis「価格；賞，ほうび」)

jin tjirgje~jin tjirje (他に tsjirgje) 「荒れ狂う，暴れまわる」

なかには，加音 -ig による「igje-動詞」やゼロ品詞転換による語形が併存するものがある。これは歴史的に -g の付加によるが (Hoekstra 1993a: 49f.)，-g の付加による語の大多数が -z で終わる語であることから，-z 以外で終わる次の語は今日では加音 -ig による品詞転換とも解釈され得る（次例は「gje-動詞」～「igje-動詞」～「ゼロ品詞転換」の順）。

nytgje~nytigje~nytsje (他に nitelje/njidzje) 「怒らせる，いらだたせる」

seingje~seinigje~seinje 「祝福する」(seine 「祝福」)

tiidgje~tidigje~tiidzje 「期待する，当てにする」

次の語は加音 -ig による「igje-動詞」やゼロ品詞転換による語形が併存せず，書き言葉的でもない。これはおそらく名詞 reizger 「旅行者」との類推によると考えられる (ib. 49f.)。

reizgje 「旅行する」(reis 「旅行」)

- ☞ reizger はオランダ語の reiziger 「旅行者」に対応する。reiziger は中高ドイツ語 (Mittelhochdeutsch) の形容詞 reisc 「騎馬武装をして出征準備の整った」(現代ドイツ語 reisch) の強変化男性単数形 reiziger 「騎馬武者」(現代ドイツ語 Reische (形容詞変化)) からの借用と考えられる (De Vries/De Tollenaere 1971: 570, Van Wijk 1912 (1980): 542)。

- ☞ オランダ語とドイツ語で上記の語に対応するのは次の語である。両言語ともに -g を伴うものはひとつもない。

フ. bewiizgje~bewiizje/bewize ⇔ オ. bewijzen (bewijs) ⇔ ド. beweisen (Beweis)

drinzgje~drinzje/drinze ⇔ drenken (drinken) ⇔ tränken (trinken)

grinzgje~grinzje (grins) ⇔ grenzen (grens) ⇔ grenzen (Grenze)

priizgje~priiizje (priis) ⇔ priizen (prijs) ⇔ preisen (Preis)

seingje~seinigje~seinje (seine) ⇔ zegenen (zeggen) ⇔ segnen (Segen)

reizgje (reis) ⇔ reizen (reis) ⇔ reisen (Reise)

加音 -ig による「igje-動詞」がオランダ語やドイツ語にも存在し，本来，西ゲルマン語に共通して中世後期から発達したのにたいして，-g による「gje-動詞」は西フリジア語に特有であり，起源も比較的新しく，17 世紀西フリジ

ア語文学ルネサンス期の偉大な詩人、ギスベト・ヤーピクス (Gysbert Japiks 1603-1666) の作品に初めて登場する。当時、「je-動詞」の -j には直前の子音を口蓋化 (de palatalisearring) する強い影響力があり、ギスベト・ヤーピクスはこれを唯一、正書法に反映させた同時代の希有な文筆家だったと考えられる。

しかも、-g の付加は単一の原因によるのではなく、直前の歯(茎)音の種類に応じて次の3種類の変化が起こった結果と考えられる (Hoekstra 1993a: 28ff.)。まず、-t/-d の直後で -g を付加したのは、後続する -j による口蓋化の影響で破擦音化 (de affrikatisearring) が起こる過程で、-t/-d の後で何らかの摩擦音が存在する ([tj]/ [dj] > [txj]/ [dxj] > [tʃ]/ [dʒ]) ことを示すために、正書法で摩擦音を表わす -g (/ɣ/) を挿入したためと解釈される。次に、-z/-r の直後で -g を付加したのは、後続する -j への移行を円滑にするわたり音を表記したためと解釈される。そして最後に、上記の語とは別に、歯音以外に -w で終わる語で w > g という変化を起こしたものが含まれる。これは -wje という二つの半母音 w/j の連続が発音しにくく、これを回避するために、軟口蓋化 (de felarisearring) を起こしたためと考えられる。ただし、この場合は歯音が先行せず、加音 -ig と混同されることはないので、上記の二つの変化とは性格が異なると言える。次の語が最後の場合の例である。

kôgje~kauje 「噛む」

roegje~roaie/roeie 「(ジャガイモを) 掘り出す, (木を) 引き抜く」

skôgje~skoaie/skouje/skouwe 「目撃する, 検査する」

✶ オランダ語とドイツ語で上記の語に対応するのは次の語である。両言語ともに -g を伴うものはひとつもない。

フ. kôgje~kauje ⇔ オ. kauwen ⇔ ド. kauen

roegje~roaie/roeie ⇔ rooien ⇔ roden

skôgje~skoaie/skouje/skouwe ⇔ schouwen ⇔ schauen

ただし、この -g はこれ以後、生産的にはならず、今日残っている「gie-動詞」の大部分はギスベト・ヤーピクスの作品に登場する語と他の語形との類

推による少数の語に限られる (Hoekstra 1993a)。-g を含む語形が今日でも用いられる理由のひとつは、古風で荘重な印象を与えるために書き言葉で好まれるためであり、また、西フリジア語の特徴としてオランダ語との相違をきわだたせる効果もある。-g を含む語形が書き言葉的であり、含まない語形が話し言葉的であるのもそのためである。

- ☞ 「gje-動詞」がギスベト・ヤーピクスの作品に多く現われるという指摘は 19 世紀前半から研究者によってなされているが、とくに 19 世紀末の西フリジア語文法書である Van Blom (1889: 121) は「gje-動詞」(-g)と「igje-動詞」(-ig)を正確に区別している。同書はまた、besteegje「(時間・金を)費やす」(オ. besteden)が besteedigje に由来し、「gje-動詞」ではなく、「igje-動詞」であることなど、個々の点も正しく明示している。20 世紀前半までに出版された西フリジア語の文法書はどれも「gje-動詞」と「igje-動詞」を明確には区別しておらず、同書はこの点ですぐれている。
- ☞ 西フリジア語でも、島の方言、すなわち、スキルヘ島方言 (Skylgersk) とスキエルムンツエアハ島方言 (Skiermûntseagersk), それにヒルペン (Hylpen, オ. Hindeloopen「ヒンデローペン」) 方言 (Hynljippersk) では、「gje-動詞」(-ig)は見られるが、「gje-動詞」(-g)はほとんど見られない (Hoekstra 1993a: 27)。

§ 92 現在分詞 (it fuortsettend mulwurd)

(1) まとめ

分詞 (it mulwurd, partisipium) には現在分詞と過去分詞がある。

現在分詞の語形は § 68 (3)(b) で述べた。用法については、形容詞的・副詞的に用い、英語の進行形のように助動詞とともに特別な構文と形成することはないことを同所で指摘した。現在分詞は過去分詞と同様に、名詞を修飾する限定用法、動詞を修飾する副詞用法、それに名詞に相当する独立用法で用いることができる。形容詞化した現在分詞も少なからず存在し、名詞化した現在分詞もある。この場合、アクセントの交替を起こす語がある。以下、用例と補足説明を加える。

(2) 現在分詞の用法

(a) 限定用法と「冠飾句」

現在分詞には形容詞の限定用法と同様に、名詞を修飾する用法がある（名詞句を [] で示す）。

[In *sliepende* wolf] rint gjin skiep yn 'e bek. 「眠っている狼は羊を捕まえる（＝走って行って口にくわえる）ことはない（＝慎重に物事を行なわない者は目標を達成できない。ことわざ）」（*sliepe* 「眠る」）（Beintema 1990: 143）

Men moat gjin [*sliepende* hûnen] wekker meitsje. 「眠っている犬は起こしてはいけない（ことわざ）」（*sliepe* 「同上」）（Dykstra 2000: 1151）

[*Kreakjende* weinen] duorje langst. 「きしむ音をたてる車が一番長持ちする（ことわざ）」（*kreakje* 「キーキーいう、きしむ」）（ib. 1152）

[In *fleanende* krie] fangt altyd wat. 「飛んでいるカラスはいつも何かを捕らえる（ことわざ）」（*fleane* 「飛ぶ」）（ib. 1152）

[*Losrinnende* hûnen] is in kwea. 「放し飼いの犬は害悪だ」（*losrinne* 「自由に歩き回る」，単数形 *is* は「犬の放し飼い」という現象自体の意味に一致，§ 30 (6)④）（ULI'S, C 7: 29）

現在分詞がふつうの形容詞と同様に副詞的な文成分や目的語を伴って，ときには複雑な修飾成分（冠飾句）を形成することがある。

Skuorbot wie [in algemien *foarkommende* sykte]. 「壊血病は普通に起こる病気だった」（*foarkomme* 「起こる」）（ULI'S, B 3: 11）

[De slim *tanimmende* befolkingsgroei] freget te grutte offers fan de natoer. 「急激に増大する人口増加は自然からあまりにも大きな犠牲を要求する」（*freegie* 「増える」）（ULI'S, C 9: 7）

Dizze map jout wiidweidige ynformaasje oer [yn Fryslân *wurkjende* en *wenjende* keunstners]. 「この資料ファイルはフリースラントで仕事をし，居住している芸術家についてくわしい情報を与えてくれる」（ULI'S, C 19: 22）

ただし，この構文は一般に話し言葉ではあまり用いず，書き言葉でもそれ

ほど多くない。とくに目的語を含んだり、修飾語句が長く複雑なときはそうである (Tiersma 1999²: 124)。

Kenne jo [de in boek *lêzende* studinte] ? 「あなたは本を読んでいるその女子学生をご存じですか」(稀)

(b) 独立用法

現在分詞は形容詞の独立用法と同様に名詞に相当する語としてはたらしき、被修飾名詞を省略して限定詞とともに名詞句を形成することがある。

In aardige definisje fan reklame is *de folgjende*: De reklame hat as doel in geastlik makliker meitsjend proses (Huizinga). 「広告の巧みな定義としては次のもの (= 次の定義 *de folgjende* (definisje)) がある: 広告とは精神的に容易にする過程である (ホイジンガ)」(*folgjend* 「次の」(3)(a) ← *folgie* 「後続する, 従う」) (ULI'S, B 10: 8)

Der wurdt dan ek in soad jild stutsen yn it sykjen fan nije medisinen en yn it ferbetterjen fan *al besteande*. 「それからまた新薬の開発と現行のもの (= すでに存在している薬品, *al besteande* (medisinen)) の改良に大金が投入される」(ULI'S, C 6: 9)

次例の *it foargeande* は中性名詞の省略ではなく, 「上述の (= 前の) こと」という意味の名詞句相当表現である。

De namme is út *it foargeande* te ferklearjen. 「その名前は上述のことから説明され得る」(ULI'S, B 17: 21)

(c) 副詞用法

現在分詞には動詞を修飾する副詞用法がある。

Hy sjocht har *laitsjend* oan. 「彼は笑いながら彼女を見つめる」(*laitsje* 「笑う」) (ULI'S, A 16: 8)

Fluitsjend rûn er fierder. 「口笛を吹きながら彼はさらに走り続けた」(*fluitsje* 「口笛を吹く」) (Boersma/Van der Woude 1980²: 81)

Maria wurdt *huverjend* wekker. 「マリアは身震いして目を覚ました」(*huverje* 「震える」) (Bosma-Banning 1981²: 77)

この用法では -e を伴うことがある (§ 68 (3)(b))。

Meastens ite wy *steande* by it oanrjocht. 「たいてい私たちは流し台のところに立って食事をする」(Bangma 1993²: 113)

ただし、この -e は義務的ではない。

Se rûn *fluitsjend(e)* de dyk del. 「彼女は口笛を吹きながら道を歩いて(下って)行った」(fluitsje 「口笛を吹く」)(Tiersma 1999²: 123)

動詞を修飾する副詞用法や、名詞と同格的に用いて関係文に相当する長い句に現在分詞を用いる、いわゆる分詞構文が文章語では見られることがある。

[Op syn teantsjes *steand(e)*] koe it bern it reedriden krekt sjen. 「つま先で立ちながら、子供はスケート競技をやっと見る事ができた」(stean 「立つ、立っている」)(ib. 123)

(3) 形容詞化・名詞化した現在分詞

現在分詞が独立した形容詞になっている語がある。

(a) 限定用法

次の現在分詞 *folgjend* はオ. *volgend*/ド. *folgend*/エ. *following* と同様に、「次の」という意味で形容詞化している。

Beäntwurdzje mûnling de *folgjende* fragen. 「次の質問に口頭で答えなさい」(*folgjend* 「次の」← *folgje* 「後続する、従う」)(ULI'S, C 17: 9 変更)

次例の現在分詞も同様である。foarôfgeand 「前記の」(← foarôfgean 「先行する」) もこれに属する。

De *neikommende* wurden moatte der yn foarkomme. 「次の単語はその中に出て来なければなりません」(*neikommend* 「次の」← *neikomme* 「後に来る」)(ULI'S, C 19: 30)

次例の ûndersteand 「下記の、次の」は ûnder 「下に」+stean 「ある、立っている」の複合語だが、ûndersteand のようにアクセントが第1音節にある。これは無アクセントの接頭辞 ûnder- をもち、意味的にも異なる非分離動詞 ûnderˊstean 「敢行する、(質問して意見を)聞き出す」とは別の語である。とくに2番目の用例に冠詞がなく、一種の限定詞のように機能しているとも

言える。

Lear de *ûndersteande* wurden. 「下記の語を学びなさい」(ULF'S, B 12: 13)

Lês *ûndersteande* tekst in pear kear goed oer. 「下記のテキストを数回よく読み直しなさい」(ULF'S, B 11: 6)

(b) 複合名詞に相当する「現在分詞＋名詞」

「現在分詞＋名詞」で複合名詞に相当する複合語（合成語）を形成する場合がある。

byldzjende keunst 「造形芸術」/*byldzjende* keunstner 「造形芸術家」
(*byldzje* 「(絵画・彫刻・写真などで) 表現する」)

fuortsettend mulwurd 「現在分詞」(*fuortsette* 「続ける」)

ôfsluttend mulwurd 「過去分詞」(*ôfslutte* 「閉じる, 終結する」)

It hûs stie oan in [*dearinnend* strjitsje]. 「その家は袋小路に面して建っていた」(*dearinne* 「行き止まりである」)(Bosma-Banning 1981²: 84)
この場合, とくに中性名詞の専門用語では形容詞の変化語尾 *-e* を欠くことが多い。

it [*fuortsettend* mulwurd] 「現在分詞」

it [*ôfsluttend* mulwurd] 「過去分詞」

これは現在分詞が「現在分詞＋名詞」という複合名詞の一部のようになっているためと考えられる。「形容詞＋名詞」という一種の複合名詞で形容詞の部分が弱変化の語尾 *-e* を欠くのも, これと同様である。

it [*iepenbier* ferfier] 「公共交通」(形容詞 *iepenbier* 「公共の」)

it [*besitlik* foarnamwurd] 「所有代名詞」(形容詞 *besitlik* 「所有の」)

(c) 名詞化した現在分詞

現在分詞が名詞化して定着した語もある。この場合, 形容詞の変化語尾 *-e* がつく。以下では冠詞をつけた語形で示す。

{in/de} *leauwende* 「信者」(*leauwe* 「信じる」)

{in/de} *oerlibjende* 「生存者, 生き残り」(*oerlibje*) 「生きのびる」

{in/de} *foldwaande* 「合格点」(*foldwaand(e)* 「十分な」← *foldwaan* 「十

分である」)

{in/de} ûnfoldwaande 「不合格点」 (ûnfoldwaande 「不十分な」 ← fol-dwaan 「十分である」)

(d) 叙述用法と副詞用法

西フリジア語の現在分詞は英語の進行形「be+現在分詞」と違って、助動詞と特別な構文を形成することはない。しかし、形容詞化した現在分詞の中には、(a)の限定用法(名詞修飾)と並んで、wêze「…である」、wurde「…になる」、bliuwe「…のままである」などのコブラ(連結詞)とともに叙述用法でも用いるものがある。

be'fredigjend 「十分な, 満足のいく」/ûnbe'fredigjend 「不十分な」 (be'fredigje 「満足させる」)

duorjend 「継続的な, 絶え間ない」 (duorje 「継続する」)

fer'bazend 「驚くべき」 (fer'baze 「驚かせる」)

fer'skillend 「異なった, いろいろな」 (fer'skille 「異なる」)

floeiend 「流暢な」 (floei 「流れる」)

passend 「適切である」 (passe 「適する」)

razend 「猛烈な, 激しい」 (raze 「暴れる, 疾駆する」)

rinnend 「走行中の, 運転中の, 流通している」 (rinne 「歩く, 走る, 動く, 進行する」)

spannend 「興奮させるような, はらはらするような」 (spanne 「張る, 緊張させる」)

ûnwittend 「無知の, 気づかない」 (witte 「知っている」)

It adfys fan dy kommisje is net binend. 「委員会の助言に拘束力はない」(叙述用法, binend 「拘束力のある, 義務的な」 ← bine 「結ぶ, 束縛する」) (ULI'S, C 14: 16 変更)

Fanselssprekkend moatte de bepalings binend wurde foar beide partijen. 「もちろん, その規定は両方の党にとって拘束力のあるものになる必要がある」(叙述用法, 同上) (WFT 1986/2 : 290 変更)

ふつうこれは動詞を修飾する副詞用法でも用いる。

De measte dokters hawwe it net altiten oan tiid om harren *yngeand* dwaande te hâlden mei de swierrichheden fan harren pasjinten. 「大部分の医者は患者の苦しみに親身になって相手をするための十分な時間がいつもあるとは限らない」(副詞用法, *yngeand* 「詳細な, 立ち入った」← *yngean* 「入り込む」; *dwaande* は (f) 参照) (ULI'S, C 6: 31)

(e) アクセントの交替

形容詞化・名詞化した現在分詞が明確な複合語の一部である場合には、アクセント (= 主アクセント) が後半部にある語が存在する。形容詞化・名詞化していないふつうの現在分詞では、このようなアクセントの交替は起こらない。

① アクセントの交替を起こしている語

i) 名詞+動詞

*belang*ˈstellend 「関心・興味をもった」(*be*ˈlang 「興味, 関心」+*stelle* 「置く, 立てる」)

*god*ˈfreezjend 「敬虔な, 神を恐れる」(*god* 「神」+*freezje* 「恐れる」)

ii) 形容詞・副詞+動詞

*goed*ˈwollend 「善意の」(*goed* 「良い」+*wolle* 「欲する」)

iii) 分離動詞

*yn*ˈgripend 「徹底的な, 断固たる」(ˈ*yn*|*gripe* 「介入する, 食い込む」)

*oan*ˈhâldend 「持続的な, 絶え間ない, しつこい」(ˈ*oan*|*hâlde* 「持続する, 持続させる, 固執する」)

*op*ˈfallend 「目立った, 特異な」(ˈ*op*|*falle* 「目立つ, 奇異な感じを与える」)

これはふつうの複合語の形容詞でも同様のアクセントの交替が起こることがあるのと似ている。

*mei*ˈlijich 「同情心のある, 思いやりのある」(ˈ*mei*˙*lijen* 「同情, 思いやり」)

*oar*ˈspronklik 「本来の」(ˈ*oar*˙*sprong* 「起源」)

*regel*ˈmjittich 「規則的な」(*regel* 「規則」)

☞ オランダ語とドイツ語で上記の語に対応するのは次の語である。オランダ語は西フリジア語に類似しているが、ドイツ語でアクセント(＝主アクセント)が後半部にある語はとくに認められない。

フ. belang^ˈstellend (be^ˈlang+stelle) ⇔ オ. belang^ˈstellend (be^ˈlang+stellen) ⇔ ド. なし
 god^ˈfreezend (god+freeze) ⇔ god^ˈvrezend (god+vrezen) ⇔ [形容詞 ^ˈgottesfürchtig (^ˈGottes•furcht)]
 goed^ˈwollend (goed+wolle) ⇔ [wel^ˈwillend (wel+willen)] ⇔ [ˈwohlwollend] (wohl+wollen)
 yn^ˈgripend (ˈyn|gripe) ⇔ in^ˈgrijpend (ˈin|grijpen) ⇔ ˈeingreifend (ˈein|greifen)
 oan^ˈhâldend (ˈoan|hâlde) ⇔ aan^ˈhoudend (ˈaan|houden) ⇔ [ˈandauernd (ˈan|dauern)]
 op^ˈfallend (ˈop|falle) ⇔ op^ˈvallend (ˈop|vallen) ⇔ ˈauffallend (ˈauf|fallen)
 形容詞 mei^ˈlijch (ˈmei•lijen) ⇔ 現在分詞 mede^ˈlijdend (ˈmede•lijden)
 ⇔ 形容詞 ˈmitleidig (ˈMit•leid)
 oar^ˈsprongklik (ˈoar•sprong) ⇔ oor^ˈspronkelijk (ˈoor•sprong) ⇔ ˈur•sprünglich (ˈUr•sprung)
 regel^ˈmjittich (regel) ⇔ regel^ˈmatig (regel) ⇔ regelmäÙig (Regel)

② アクセントの交替を起こしていない語

アクセントが前半部にある語も多い。

i) 名詞＋動詞

ˈstimhawwend 「有声の」(stim 「声」+hawwe 「もっている」)
 ˈtsjinstdwaand 「勤務中の, 当直の」(tsjinst 「勤務, 奉仕」+dwaan 「する」)
 ˈskoalgeand 「就学中の, 就学義務のある」([nei] skoalle 「学校 [へ]」+gean 「行く」)

ii) 形容詞・副詞＋動詞

ˈstilsteand 「静止した, よどんだ」(stil 「静かな」+stean 「(…の状態で) ある, 立っている」)
 ˈstilswijend 「無口な, 暗黙の, 言外の」(stil 「静かな」+swije 「沈黙している, 静かになる」)

iii) 分離動詞の分離成分：不変化詞

ˈyngeand 「詳細な，立ち入った」 (yn|gean 「入り込む」)

ˈtrochgeand 「直通の，通り抜けの，一貫した」 (ˈtroch|gean 「通り抜ける，実行される」)

ˈtrochslaand 「決定的な，著しい」 (ˈtroch|slaan 「打ち抜く，突き抜ける」)

☞ オランダ語とドイツ語で上記の語に対応するのは次の語である。

フ. ˈstimhawwend (stim+hawwe) ⇔ オ. ˈstemhebbend (stem+hebben)
⇔ ド. なし (Stimme+haben)

ˈtsjinstdwaand (tsjinst+dwaan) ⇔ ˈdienstdoend (dienst+doen) ⇔
[ˈdiensthabend (Dienst+haben)]

ˈskoalgeand ([nei] skoalle+gean) ⇔ ˈschoolgaand ([naar] school+gaan) ⇔ なし ([{in/auf} die] Schule+gehen)

ˈstilsteand (stil+stean) ⇔ ˈstilstaand (stil+staan) ⇔ ˈstillstehend (still+stehen)

ˈstilswijend (stil+swije) ⇔ ˈstilswijgend (stil+zwijgen) ⇔ ˈstillschweigend (still+schweigen)

ˈyngeand (yn|gean) ⇔ [ˈdiepgaand (diep 「深い」+gaan 「行く，進行する」)] ⇔ ingehend (ein|gehen)

ˈtrochgeand (ˈtroch|gean) ⇔ ˈdoorgaand (ˈdoor|gaan) ⇔ ˈdurchgehend (ˈdurch|gehen)

ˈtrochslaand (ˈtroch|slaan) ⇔ ˈdoorslaand (ˈdoor|slaan) ⇔ ˈdurchschlagend (ˈdurch|schlagen)

③ アクセントの位置に揺れが認められる語

アクセントの位置が前半部か後半部かで揺れが認められる語もある。

i) 名詞+動詞

fruchtˈdragend (Zantema 1984: 315, Dykstra 2000: 192)/ˈfrucht-
dragend (WFT 6/1989: 387) 「実り豊かな」 (← frucht 「果実，成果」+
drage 「運ぶ，もたらす」)

ii) 形容詞・副詞+動詞

fanselsˈsprekkend (WFT 5/1988: 232, Dykstra 2000: 135)/fanˈsels-
sprekkend (Zantema 1984: 232) 「自明の」 (fanˈsels 「自然に，もちろ

ん」+sprekke「話す，表明する」)

iii) 分離動詞の分離成分：小辞（不変化詞）

ˈút|slutend/útˈslutend「もっぱらの，独占的な」(ˈút|slute「閉め出す，除外する」)

☞ オランダ語とドイツ語で上記の語に対応するのは次の語である。

フ. fruchtˈdragend/ˈfruchtdragend (frucht+drage) ⇔ オ. vruchtˈdragend (Heemskerck/Zonneveld 2000: 802)/ˈvruchtdragend (GWNT 1992: 3489) (vrucht+dragen) ⇔ ド. ˈfruchttragend (Frucht+tragen) ⇔ fanselsˈsprekkend/fanˈselssprekkend (fanˈsels+sprekke) ⇔ vanzelfˈsprekend (vanˈzelf+spreken) ⇔ なし (von selbst+sprechen) ˈút|slutend/útˈslutend (ˈút|slute) ⇔ uitˈsluitend (ˈuit|sluiten) ⇔ [形容詞ˈausschließlich/ausˈschließlich] (ˈaus|schließen)

(f) -e を伴う形容詞化・副詞化・前置詞化した現在分詞

① -e を伴う現在分詞

§ 68 (3)(b)で述べたように，現在分詞は副詞用法で -e を伴うことがある。一方，-e を伴う語形として定着している語が少数存在する。

dwaande「従事している，多忙な」(②参照，dwaan「する」)

geande「現行の，運転中の，影響中の」(gean「行く，進行する」)

副詞 saˈdwaande「そのようにして」(sa「そのように」+dwaan「する」；アクセントの交替に注意)

Sadwaande wurdt gâns jild stutsen yn it sykjen fan nije medisinen.
「そのようにして新薬の開発に大金が投入される」(ULF'S, C 11: 7)

形容詞・前置詞 oanˈgeande「…にかんする，…にかんして」(ˈoan|gean「…に関係する」；アクセントの交替に注意)

次の語には副詞用法以外にも -e がつくことがある。

foldwaand(e)「十分な」/ûnfoldwaand(e)「不十分な」(foldwaan「十分である」)

ôfdwaand(e)「十分な，決定的な」(ôf|dwaan「取り外す，扱う，片付ける」)

形容詞・前置詞 oanbelangjend(e)「…にかんする，…にかんして」

(oan|belangje 「…に関係する」)

② dwaande 「従事している (mei …に), 多忙な (mei …で)」

形容詞化した現在分詞として頻繁に用いる語に①でも触れた *dwaande* がある(オ. *bezig*/エ. *busy*/ド. *beschäftigt* に相当)。*dwaande* は *te*-第2 不定詞句を伴うなどして, 進行形としての役割を担うこともある (§ 96 (8)(e))。なお, 過去分詞 *dien* 参照 (§ 93 (3)(a)④)。

Mem is dwaande mei de tee. 「母はお茶を入れている」(Bosma-Banning 1981²: 11)

Wy binne dwaande mei de Fryske les. 「私たちはフリジア語の勉強をしています」(ib. 40)

Jûnenlang hawwe hja dwaande west om it feest in feestlik oansicht te jaan. 「幾晩もの間, 彼らは祭りに盛大な装いを施すために働いていた」(ULI'S, A 17: 7)

Wat is dêr dwaande? 「そこで何が起きているのですか」(Zantema 1984: 209)

De measte dokters hawwe it net altiten oan tiid om harren yngeand dwaande te hâlden mei de swierrichheden fan harren pasjinten. 「大部分の医者患者の苦しみに親身になって相手をするための十分な時間がいつもあるとは限らない」(*jin dwaande hâlde* 「…に従事する・取り組む (mei …に)」(ULI'S, C 6: 31)

次の文は副詞用法の例である。

Al dwaande leart men. 「物事を行ないながら人は学ぶものだ (= 経験は最良の師。ことわざ)」(Dykstra 2000: 1150)

§ 93 過去分詞 (*it ôfsluttend mulwurd*)

(1) まとめ

過去分詞の語形は § 68 から § 72 にかけて詳述し, 助動詞とともに用いる完了形・受動態での用法はそれぞれ § 75 と § 78 で言及した。また, 形容詞化した過去分詞と能動態完了形・受動態完了形の区別については, § 78 (5)(d) で用

例とともに説明した。

過去分詞は現在分詞と同様に、名詞を修飾する限定用法、動詞を修飾する副詞用法、それに名詞に相当する独立用法で用いることができる。また、形容詞化した過去分詞には *wêze* 「…である」などのコブラ（連結詞）とともに叙述用法でも用いるものがある。ただし、この場合は上述のように、能動態完了形・受動態完了形との区別に注意する必要がある。

以上の用法の中でとくに注意が必要な点を選んで補足説明する。

(2) 過去分詞の用法：補足

(a) 限定用法：自動詞と他動詞の相違

過去分詞は動作の結果を明示する場合に、名詞を修飾する限定用法で用いることができる。自動詞では状態の移行を表わし、一般に完了の助動詞 *wêze* に支配される語がこれにあたる。修飾された名詞は能動態における主語に相当する。一方、他動詞では結果を明示するのは能動態における動作主としての主語ではなく、被動作主としての直接目的語なので、過去分詞は受動態の意味になる。修飾された名詞は能動態における被動作主としての直接目的語に相当する。

① 自動詞の過去分詞

Sy hawwe [in *ferdwaalde* hûn] fûn. 「彼らは道に迷った犬を見つけた」(*ferdwale* 「道に迷う」) (ULI'S, B 7: 21)

Allinne by [in *mislearre* rispinge] waarden fleis en molke brûkt. 「不作の年(＝うまくいかなかった収穫のとき)だけに肉と牛乳が用いられた」(*mislearje* 「失敗する」) (ULI'S, B 3: 11)

[De *ôffallen* blêden] waaie fuort op 'e wyn. 「落ち葉(＝落ちた葉)が風に吹かれて飛んでいく」(*ôffalle* 「落下する」) (ULI'S, A 9: 7)

Yn it iepen fjild rekket men net gau *útsjoen*. 「広い野原ではすぐに見飽きる(＝見飽きるという状態になる)ということはない」(*útsjen* 「見渡す, 見終わる」) (Bosma-Banning 1981²: 150)

② 他動詞の過去分詞

[In *lime* boek] falt samar út elkoar. 「にかわで綴じた本はすぐにばらばらになる」(limje 「にかわで綴じる・接着する」)(ULI'S, A 16: 13)
Op 'e tafel stiet [in *snijde* bôle]. 「テーブルの上にスライスした(＝スライスされた)パンがある」(snije 「スライスする, 切る」)(ULI'S, A 3: 26)

(b) 限定用法：冠飾句

現在分詞やふつうの形容詞と同様に, 過去分詞が副詞的な文成分や目的語を伴って複雑な修飾成分(冠飾句)を形成することがある。

[De kursyf *printe* wurden] binne bywurden. 「斜体字で印刷されている語が副詞です」(printsje 「印刷する」)(ULI'S, B 19: 14)

[Mei de hân *skreaune* ferhalen] wurde úttypt. 「手書きの(＝手で書かれた)物語はタイプ打ちされる」(skriuwe 「書く」)(ULI'S, A 15: 8)
Dit jout der [in moai en mei sin wat *oerdreaun* foarbyld] fan. 「これはそれについて意図的に多少誇張された例である(＝例を提供する)」(oerdriuwe 「誇張する」)(Breuker et al. 1984: 17 変更)

Foar de folsleinens moat hjir ek noch in wurdmennich sein wurde oer [de mei 'der' as earste lid *foarme* pronominale adverbial]. 「完全さを期するために, 最初の成分が der を用いて形成された代名詞的副詞について, ここでなおまた一言しておく必要がある」(foarmje 「形成する」)(Hoekema 1983: 89)

Dit wurd ferwiist nei [in sa't liket al earder *neamd* plak]. 「この語はすでに以前に名前を挙げられたと思われる箇所を指し示している」(neame 「名指しする, 名づける」)(ib. 88 変更)

(c) 副詞用法：分詞構文

動詞を修飾する副詞用法や, 名詞と同格的に用いて関係文に相当する長い句に過去分詞を用いる, いわゆる分詞構文が文章語では見られることがある。

De Noord Friesche Locaal Spoorwegmaatschappij, *oprjochte* yn 1899, hat yn 1901 it spoar Ljouwert—Stiens—Dokkum—Mitselwier oan-

lein. 「北部フリースラント地方鉄道会社は、1899年に設立されたものだが、1901年にリャウエト(オ. Leeuwarden「レーヴァルデン」)ースティエンス(オ. Stiens「スティーンズ」)ードクム(オ. Dokkum「ドクム」)ーミツェルヴィエル(オ. Metslawier「メツラヴィール」)に鉄道を敷いた」(oprjochtsje「設立する」)(ULI'S, C 18: 8 変更)

次は berne「生まれた」を含む用例である。berne は本来、bernje「生む」の過去分詞だが、ほとんど形容詞化しているとも言える。

Berne yn 1821 yn Froubuorren, komt Waling Dykstra yn 1840 as bakker yn Spannum te wenjen. 「ヴァーリング・ディクストラ (1821－1914, 西フリジア語辞書編集者, 作家, 民俗学者)は1821年にフラウオレン(オ. Vrouwenparochie「ヴラウエンパロヒー」)に生まれ、1840年にパン屋としてスポヌム(オ. Spannum「スパヌム」)で暮らすようになった」(Stienstra 1982: 71)

(d) 名詞句＋過去分詞＋krije

これは能動態で間接目的語に相当する受益者の意味の名詞句を主語として表現する構文として、ある程度の生産性がある(ド. bekommen-受動)。たとえば、tastjoere「送る、送付する」を例にとると次のようになる。

immen eat tastjoere 「人に物事を送る」

～eat tastjoerd krije 「物事を送られる・送ってもらう」

De boekjes mei de programs foar de nije kursussen, dy't alle jierren útjûn wurde, kinst fergees *tastjoerd krije*. 「毎年、刊行される新しい講習のプログラムつきの本を君は無料で送ってもらえる」(ULI'S, B 19: 26 変更)

(3) 形容詞化した過去分詞など

(a) 形容詞化した過去分詞

形容詞化した過去分詞には多くの語がある。次にいくつか例を示す。

① 限定用法

Yn [it omkearde gefal] leit dat gelyk. 「逆の場合もそれは同様です」(omkeard「逆の」← omkeare「逆にする、裏返す」)(ULI'S, B 12: 11)

[*Dronkene lju*] en lytse bern sizze de wierheid. 「酔っぱらい (= 酔った人々) と小さな子供は真実を言う (ことわざ)」 (dronken 「酔っぱらった」 ← *drinke* 「飲む」) (Dykstra 2000: 1150)

Freegje jo kursuslieder of [*in betûft* frysktalige]. 「講師の先生かフリジア語の熟達した話し手にたずねなさい」 (betûft 「熟達した, 能力のある」, *betûfe という動詞は存在しない) (ULI'S, B 4: 15)

② 複合名詞に相当する「過去分詞＋名詞」

形容詞化した過去分詞に限らず, 「過去分詞＋名詞」で複合名詞に相当するものを形成する場合, とくに中性名詞のときに形容詞の変化語尾 -e を欠くのは, 現在分詞や形容詞と同様である (§ 92 (3)(b)).

it {[*beskaat* lidwurd]/[*ûnbeskaat* lidwurd]} 「定冠詞/不定冠詞」 (beskaat 「特定の, 個別化・限定された」/ûnbeskaat 「不特定の, 個別化・限定されていない」 ← *beskiede* 「限定する」)

③ 副詞用法

Hja seagen him *benijd* oan. 「彼らは彼を興味深そうに見つめた」 (benijd 「好奇心に満ちた」 ← *benije* 「好奇心を起こさせる」) (Bosma-Banning 1981²: 95)

Hy docht de doar iepen en sjocht *ferheard*. 「彼はドアを開けて, 驚いて目を向けた」 (ferheard [fərhɛt] 「驚いた」 ⇔ *ferhearre* [fərjɛrə] 「尋問する, 聞き届ける; 聞き違える (jin ferhearre)」) (ULI'S, A 16: 8)

Hy docht it krekt *ferkeard*. 「彼はそれをまさに間違ったやり方でやる」 (ferkeard 「間違った」 ⇔ *ferkeare* 「変わる, 交わる」) (ULI'S, C 7: 12)

De Beetsters wenje *ferspraat* troch it fjild. 「ベーツの住民は野原に散在して居住している」 (ferspraat 「散在した」 ← *ferspriede* 「散らばる」) (ULI'S, B 2: 15 変更)

④ dien 「過ぎ去った, 終わった, けりがついた」

dien は dwaan 「する」の過去分詞だが, 上記の意味では形容詞化しており, 慣用句を含めて頻繁に用いる点で特筆に値する。なお, 現在分詞 dwaande 参照 (§ 92 (3)(f)).

It is mei him *dien*. 「彼はもうだめだ/彼は死んだ」 (Zantema 1984: 176)

It is mei ús *dien*. 「私たちの友情はおしまいだ」 (ib. 176)

It lêste stik fan dat boek *hie* er yn 'e hjerst fan 1976 *dien makke*. 「その本の最後の部分を彼は 1976 年の秋に完成していた」 (*dien meistje* 「完成する, 終える」) (Ut de Smidte 1997/2: 1)

Hast it al heard tink, 'k ha *dien krige* by de baas. 「もう聞いたと思うけどさ, おれは上司に (=上司のもとで) クビにされちゃったよ」 (*dien krije* 「免職になる, クビにされる」) (ULFS, C 13: 13)

Nei [*dien wurk*] is 't {noflik/goed} rêsten. 「仕事を終えた後 (=終わった仕事の後) は {心地よく/よく} 休める (ことわざ)」 (Beintema 1990: 27, Dykstra 2000: 1153)

(b) 副詞化・数量詞化・前置詞化した過去分詞

① 副詞化した過去分詞

koartsein 「ようするに」は '*koart* 「短く」+ *sizze* 「言う」' の複合語として副詞的に用いる。

Koartsein brûkst taal as kommunikaasjemiddel. 「ようするに, 言語はコミュニケーション手段として使うのである」 (ULFS, B 20: 16)

② 数量詞化した過去分詞

ferskate 「いくつかの, さまざまの」は語形的に対応する動詞 *ferskiede* 「死ぬ」とは意味がかけ離れており, 形容詞化しているだけでなく, 数量詞化している。

ferskate sokke minsken 「何人かのそのような人々」 (Hoekstra 1994: 520)

de *ferskate* minsken 「その何人かの人々」 (ib. 520)

ferkâlden 「風邪を引いた」については § 88 (1)(a) 参照。

③ 前置詞化した過去分詞

sjoen 「…を考慮して, …を見れば」, *útsein* 「…を除いて」

複合前置詞: *ôfsjoen fan* 「…を別にして, …を除いて」

sjoen (← *sjen* 「見る」) と *útsein* (⇔ *útsizze* 「述べる, 表明する」) の 2

語は目的語を伴う点で、過去分詞としては例外的である。意味的にも論理関係を表わしており、前置詞とみなすことができる。ôfsjoen fan (←ôfsjen「断念する、放棄する (fan …を)」も複合前置詞とみなすことができる (オ. afgezien van 「…を別にして、…を除いて」)。

Der wurdt wol oannommen, dat fan âlds it suden fan Fryslân mear as it noarden iepen lei foar ynterferinsjes. Dat soe [sjoen de lizzing] hiel skoan te begripen wêze.「フリースラントの南部は北部よりも言語干渉を受けやすいと考えられている。そのことは位置を考慮すれば、きわめて良く理解できよう」(Breuker et al. 1992: 17)

[Utsein Wim] slaggen se allegearre foar it eksamen.「ヴィムを除いて彼らは全員、試験に合格した」(Vledder/De Jager-De Boer 1991: 338 変更)

オランダ語とドイツ語で上記の語に対応するのは次の語である。

フ. koartsein ⇔ オ. kort gezegd ⇔ ド. kurz gesagt
ferskate ⇔ verscheidene ⇔ verschiedene
sjoen ⇔ gezien ⇔ なし
ûtsein ⇔ [uitgezonderd] ⇔ [ausgenommen]
ôfsjoen fan ⇔ afgezien van ⇔ abegesehen von

参考文献

(前回までに掲載したものを除く)

Abraham, Werner/Janssen, Theo (Hrsg.). *Tempus — Aspekt — Modus*. Tübingen. Niemeyer.

Hoekstra, Jarich. 1998. *Fryske wurdfoarming*. Ljouwert. Fryske Akademy.

Hofstra, Tette. 1989. “In nijsgjirrich boek oer “Noard-see-germaanske” untjouwingen en it Aldfrysk(oer: M. L. A. I. Philippa, *Noord-zee-germaanse ontwikkelingen*)”. *Tydskrift foar Fryske Taalkunde* 5. 33-38.

Van Blom, Ph. 1889. *Beknopte Friesche spraakkunst*. Joure. R. P. Zijlstra.

Van der Meer, Geart. 1988b. “*k*-verbs in some West-Germanic languages”. *NOWELE* 11/12. 51-72/3-14.

Van der Meer, Geart. 1989. “Some aspects of verbal repetition and diminution”. In: Abraham/Jansen (Hrsg.). 323-341.

Van Wijk, N. 1912 (1980). *Franck's etymologisch woordenboek der Nederlandsche taal*. 's-Gravenhage. Nijhoff.

Vledder, Geart/Tetty de Jager-de Boer. 1991. *Frysk skoalwurdboek. Ljouwert*. AFUK.

* 本稿は筆者の以下の論文に続く西フリジア語の文法構造の記述である。

「西フリジア語の音韻と正書法 (1)」(北海道大学文学部紀要 44-1, 第 85 号, 1995, 37-81)

「西フリジア語の音韻と正書法 (2)」(北海道大学文学部紀要 44-2, 第 86 号, 1995, 43-111)

「西フリジア語の文法構造 — 冠詞, 名詞, 形容詞 —」(北海道大学文学部紀要 45-1, 第 88 号, 1996, 21-81)

「西フリジア語の文法構造 — 代名詞 —」(北海道大学文学部紀要 45-2, 第 89 号, 1997, 79-176)

「西フリジア語の文法構造 — 数詞, 副詞, der —」(北海道大学文学部紀要 45-3, 第 90 号, 1997, 171-246)

「西フリジア語の文法構造 — 前置詞と後置詞 (1) —」(北海道大学文学部紀要 46-1, 第 91 号, 1997, 23-62)

「西フリジア語の文法構造 — 前置詞と後置詞 (2) —」(北海道大学文学部紀要 46-2, 第 92 号, 1998, 41-64)

「西フリジア語の文法構造 — 接続詞 —」(北海道大学文学部紀要 46-3, 第 93 号, 1998, 65-121)

「西フリジア語の文法構造 — 動詞 (1) —」(北海道大学文学部紀要 47-2, 第 95 号, 1998, 21-97)

「西フリジア語の文法構造 — 動詞 (2) —」(北海道大学文学部紀要 47-3, 第 96 号, 1998, 53-72)

「西フリジア語の文法構造 — 動詞 (3) —」(北海道大学文学部紀要 47-4, 第 97 号, 1999, 89-124)

「西フリジア語の文法構造 — 動詞 (4) —」(北海道大学文学部紀要 48-1, 第 98 号, 1999, 21-55)

「西フリジア語の文法構造 — 動詞 (5) —」(北海道大学文学研究科紀要 101 号, 2000, 93-129)

「西フリジア語の文法構造 — 動詞 (6) —」(北海道大学文学研究科紀要 108 号, 2002, 23-100)

記述上の問題点については筆者の次の論文を参照。

「西フリジア語文法記述の問題点」(北海道大学文学部紀要 44-3, 第 87 号, 1996, 41-107)

* 本稿は平成 15 年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。

研究課題：「西フリジア語文法記述のための最終的研究 — ゲルマン語類型論の構築に向けて」, 基盤研究(C)(2), 課題番号 14510599 (研究代表者 北海道大学大学院文学研究科教授 清水 誠)

【訂正】

「西フリジア語の文法構造——接続詞」

* 65 ページ

誤：X 接続詞

正：IX 接続詞

「西フリジア語の文法構造——動詞 (1)」

* 21 ページ

誤：XI 動詞

正：X 動詞

(上記以外の誤植・訂正・追加については別の機会に譲る)